

江戸時代の「家」と女性

著者	中野 節子
雑誌名	市史かなざわ
巻	3
ページ	66-67
発行年	1997-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2297/7471

江戸時代の「家」と女性

中野 節子

江戸時代の、例えば藩に提出された由緒帳を見ると、そこでは女性の名前は誰々の妻とか、娘などと書かれ、名前の現れないのが普通である。そのために当時の「家」社会の中で、女性は名前すら残せないほど人権が認められていなかったと考えられがちである。それはまず、当時の公文書や公私の世界のあり方を、現在のものと同様に考える所からくる誤りであろう。文書を少し注意して見ていくと、「家」の中の女性の別の姿が浮かんでくるものである。

まず町人について言えば、武士と異なつて家や家業を一時的にせよ継ぐ女性たちは決して少数ではない。町人の家における女性の位置を金沢全体でみることができるのは、家々についてその家主と家業を書きあげている、文化八年（一八一二）の「金沢町名帳」である。それによると、当時女性で家主である者の数は全体の八パーセントを占めて、決して特異な例ではないことを示している。

江戸時代は男系相続であるから、女性が家主として現れるのは、基本的には男系での相続人が途切れている場合ということになる。

町によって、占める割合は零から一四パーセント余りと多様だが、下層町人の集まるような町では女性の家主が登場することが多い。

彼女たちの職業の約四分の三に当たる七四パーセントは、芋カセ（麻糸とり）、かな引、笠縫い（加賀笠作り）といわれるもので、こ

れらが女性が資金のないまま家計を支えるために取り得る職の典型で、現在で言えば内職的なものである。

これらは女性の職業選択の不自由さを物語ると言えるが、一方、店舗経営を担っている女性たちも少なくない。大店の多い本町筋では、家業としての薬種問屋、合薬商売、宿屋、銭商売などを継ぐ例がみえる。そこでは奉公人や親類の助けがあつたことが想定されるが、それでも女性自身の商才も求められたであろう。一方、中・小店舗が並ぶ町においては小間物・古手・菓子、荒物、塩・醬油、四十物、足駄、たばこ、貸本、そばなど多様な商売で、それらは女性たち自身の働きで営まれていたとみてよい。

一方、町人に対して、その軍事組織という特徴のためにも、武士階級では女性が「家」から排除されていたといったイメージが強い。しかしその中で、女性を始祖とする武士の家が見付つた。金沢市三社町中村家は、加賀藩の年寄り女中であつた中村という女性を始祖としてゐる。

中村は（実名は伝えられていない）、寛永二十年（一六四三）に大小将組の中村次郎右衛門の娘として生まれた。父親の次郎右衛門は二百石取り、加賀藩にあつては決して禄高は高くはないが、現実的には藩政を支えていた階層である。中村の生まれた家は、慶長四年

(二五九九) 祖父に当たる三左衛門が、新知二百石で召し出されて
本家(三百石)から分家、同七年に五十石の加増、元和三年(一六
一七)さらに百石を加増されている。この後も暫くは藩政の確立時
期に当たり、藩臣の増加、家禄の増加などの機会も多く、三左衛門
の家も含め武家の家々には興隆の活気がみなぎっていた時期といえ
る。この三左衛門は男子がいまま元和八年に死去したため、兄
弟であった中村の父がその後を継いだのである。中村は家庭でも活
気ある当時の社会の雰囲気にも包まれて育ったであろう。

その後中村は定番馬廻り組高崎小市郎(小一郎ともある)と結婚、
一子三郎左衛門をもうけたが、延宝七年(一六七九)三十七才の時
小市郎が病死、三郎左衛門も早世した。そして、天和二年(一六八
二)三十九才で広式(藩主とその家族が日常生活をする所)に年寄
り女中として召し出された。その後「政所様」*の上京に介副役とし
て同行、そのまま京都に滞在したと記録されている。当時藩主の家
族に付く奉公人には、その身分、立場と同時に相応の教養、芸能を
持っていることが求められた。しかも、文化の中心である京都へ召
される基準もあつたであろう。選ばれた中村は、本人の才能、努力
と共に、育つた家庭、稼ぎ先で、それらの才能を育てていく機会が
持てたとみなければならぬ。

*「政所」は綱紀の娘で正徳二年(一七一二)京都の公家一条吉忠に嫁
した直姫とも考えられるが、未詳。

その後中村は、年取つたことを理由に暇をもらい、京都で勤めて
いた時同様の扶持で、金沢で最後の時を過ごし、享保十五年(一七

三〇)に八十九才の高齢で死去した。

実子のない年寄り女中の中村は、享保五年射手組の沢村三郎右衛
門の三男を養子として中村家を継がせ、中村弥五左衛門を名乗らせ
た。この弥五左衛門の養子を許可したのは加賀藩五代の前田綱紀で
あり、新知百五十石を与えられた。この中村家はその後代々続いて、
明治を迎えたのである。

このように女性を始祖にする武士の家は、特殊な例であるが、中
村に見るような女性の行動力を決して特殊と見るわけにはいかな
い。この頃活躍していた熊沢蕃山は、特に中下層の武士の家では、
時には当主に代わって用をたす女房たちが求められていると述べて
いる。また教養を積んだ武士の女性が例外的でないことは、従来の
研究が明かにしている。武士階級の女性たちは、束縛と従属に身を
屈していたわけではないのである。

現在残された由緒帳などだけからでは、女性たちの社会的活動は
ほとんど見えてこない。しかし、女性史の発掘が求められている現
在、意外に多様な女性たちの動きが残された史料から描き出されて
いくことであろう。

(文化八年の「金沢町名帳」は、金沢市図書館叢書(一)として、
金沢市立玉川図書館から平成八年に翻刻刊行されている。)

(なかの せつこ 金沢大学文学部助手)